

近代中国の先駆者における世界認識と中国近代化： 魏源、郭嵩燾から康有為にかけて

著者	王 曉秋
会議概要（会議名，開催地，会期，主催者等）	東アジアにおける近代化の指導者たち，北京大学，1995年12月4日-7日
ページ	43-54
発行年	1997-03-31
シリーズ	中国国際シンポジウム
URL	http://doi.org/10.15055/00001624

4 近代中国の先駆者における世界認識と中国近代化

——魏源、郭嵩焘から康有為にかけて

王 曉 秋

自我閉鎖的で、世界認識に欠けている国家には、近代化の実現があり得ない。近代中国の先駆者達は、世界を認識し、近代化を目指す過程において、長く曲折した、しかも険しい道を経た。本論文はアヘン戦争時期の魏源、洋務運動時期の郭嵩焘と戊戌維新時期の康有為という近代中国における世界に向かった優れた代表人物及びその著作を通じて、十九世紀後半、中国の独立、富強と進歩を勝ち取るための先駆者達がいかに一步一步に世界を認識し、中国の近代化発展を押し進めていたかという歴史の軌跡を跡付けてみる。

一、魏源と「目を開いて世界を見る」

長い間、中国歴代王朝の支配者は、皆中国を世界の中心とし、自らを天朝上国と名乗り、周辺の国々を野蛮で遅れたものとして中国に朝貢すべき「夷狄」と見なしていた。清朝乾隆皇帝はイギリス国王ジョージ三世に与えた勅書において「天朝は万国を統馭し、一視同仁」と述べられている。乾隆年間に編集した『皇朝文献通考』における世界に対する描写は「中土が大地のなかに居り、その四方に瀛海が環る。」というものである。乾隆と嘉慶年間に編集した二部の『大清会典』においては、イギリス、オランダ、イタリア、ポルトガル等を含んだ西洋各国を中国への「朝貢国」としていた。1840年に、イギリスが引き起こしたアヘン戦争は、晴れた空に雷が鳴ったように、中国封建支配者の夢を破った。しかしかれらは軍艦に乗って侵してきたイギリスについては、実は「その由来を知らなかった」のであった。道光皇帝は慌てて大臣にイギリスが一体どこに位置し、どのぐらいの大きさがあるかを尋問した。かれはイギリスが大西洋の島国という地理的常識さえ持たず、イギリスがロシアと隣接しているかどうかという滑稽な質問を出すほどであった。アヘン戦争で中国が失敗し苦辱を嘗めさせられた結末は、世界に対する愚かな無知の悲しさを物語っている。

アヘン戦争の強烈な刺激を受けて、中国の官僚と知識人のなかの一部の愛国進歩の識者達は、目を開いて世界を見、国際情勢を探り、外国の歴史地理を研究し、失敗の教訓をまとめ、敵を御する方法と国を救う道を求めるようになった。アヘン戦争後、閉鎖した国門の開放によって、かれらをして外国の新聞、書籍、地図及び戦争中のイギリス軍捕虜への尋問と外国商人、宣教師に直接尋問などの方式をとって、多くの世界知識を獲得せしめたのである。

林則徐（1785～1850）は近代中国の目を開いて世界を見る第一人者であったと言える。かれは道光皇帝により、広東に派遣されてアヘン禁止の指導と抗英闘争を進めた当時に、すでに人々を集めて各種の西洋文出版物を翻訳していた。1841年、かれは人々にイギリス人ヒュー・マレーの『世界地理全書』を訳させ、自らもそれを添削し修正することに及び、『四洲志』という本を編纂した。本のなかでは世界五大洲、三十余りの国の地理と歴史を述べており、中国近代における初めての系統的な世界地理を紹介する書籍であった。しかしこの本は、いうならば未だ一つの訳作だったとしか言えなかった。

林則徐は広東での禁煙と抗英に功がありながら、投降派の罵りと陥れに遭わされ、その結果道光皇帝の令によって、役職を止められ、新疆に追放されてしまった。1841年6月に、林則徐が北上の途中で鎮江に寄って、友人の魏源と会った。二人は同じ宿に泊って徹夜の長い会話を

交わした。林則徐は自ら広州で収集し、翻訳した一部の資料と『四洲志』の原稿を魏源に渡し、一層の外国歴史地理の研究と新しい本の編集を盟友に頼んだのである。魏源(1794~1857)は、字は默深、湖南邵陽の人、当時の著名な学者であった。かれはその後すぐ著述に没頭し、『四洲志』全文を引用したほか、歴代の史志、内外の著作、翻訳の書物、上奏文稿など各種の資料を使って、1843年1月において、併せて57万字の『海国図志』五十巻を編纂した。のちにまた相前後してそれに修訂増補を加え、1847年に六十巻に補充し、1852年にさらに一百巻に増加した。百巻本は全書で約88万字となり、並びに各種の地図75幅、西洋砲船器芸図説42頁がついている。その内容は各国の歴史・地理の外に、またアヘン戦争の経験と教訓を総決し、海防戦略戦術を論述する「籌海篇」、西洋人の論述を翻訳した「夷情備采」及び西洋の技術や砲船の図説等がある。これは近代中国人が独自に編纂した世界地理・歴史に関する初めての著作であり、同時に当時の東アジアの国々にある世界知識関係の内容がもっとも豊富な大著の一つであった。当時、中国人が編纂したその他の世界地理・歴史関係の著作には、さらに徐繼畬の『瀛環志略』や梁廷枏の『海国四説』等がある。

魏源の『海国図志』は、「中国中心」「天朝上国」等の古い観念を突破し、中国が世界の中心ではなく世界の一員であって、外国の長所を学ぶべきとする新しい世界像を樹立していた。かれは香港のイギリス会社が描いた地球全図を全書の首に置いて、如実に世界の全体像と世界のなかの中国の位置と大きさを反映した。本のなかでは、「夷人をもって夷地を談ずる」のを強調し、外国の資料を利用し、世界各国の真実の状況及び各種の近代的自然科学の知識を紹介するのに努めたのである。さらに貴重なのはかれが『海国図志』のなかで「夷の長技を師して以て夷を制する」という思想を提起し、世界情勢を知り、外国の進んだ軍事や科学技術を学んで、それをもって富国強兵を実現させ、外国の侵略に抵抗すべしとするという点であった。中国近代における、西洋に習い、近代化の道を模索する時代の先端を開いて、その後の洋務運動、維新運動に重要な思想的啓蒙の意味を与えていた。

注目すべきなのは、魏源の『海国図志』が早くも日本に伝入し、広く流布するのを得て、強烈な反響を引き起こして、日本の開国と維新を押し進めるのに資したということである。長崎の輸入漢籍の書籍元帳の記録によると、『海国図志』が最初に日本に入ったのは、1851年であった。中国の対日貿易の商船によって、三部もたらされた。この三部は長崎奉行所の役人は本のなかにカトリックに関する文字があるのを発見し、徳川幕府の『天保西学鎮圧令』に従って幕府に呈上したため、結局幕府の御用文庫と学問所に収められていた。その後も次々と『海国図志』を輸入した記載があった。市場の供給が足りなくて、本の値段もどんどん上がったようである。こうして『海国図志』は広く日本知識人や識者に重じられ、人々は奮ってそれに翻刻や研究及び評論を加えていたのである。日本の各図書館に対する筆者の調査によると、1854年から1856年までの三年間で、日本で出版した『海国図志』選本の翻刻本、訓点本と和訳本は、21種である。中でも原文の翻刻本と訓読記号を加える訓点本は6種に、邦訳の和解本は15種に上る。選本の内容は、「籌海篇」「夷情備采」や武器図説に関するものは5種、アメリカに関するものは8種、イギリスに関するものは3種、ロシアに関するものは2種、その他フランス、ドイツ、インド関係は各1種である。そこから幕末日本人の世界各国に対する異なった関心所在

を見ることができる。

中国近代における初めての世界の地理・歴史と海防知識を紹介する名著『海国図志』が日本に伝わって、同じ西洋列強の衝撃に対面し、急いで世界を知り、海防を強めようとした幕末の日本知識人に大きな啓発と心の支えを与えた。従って当時の日本人学者杉木達が「本書は幕末の海警が急を告げる時に訳され、最も有用の挙と言える。これは世界地理に茫然と無知な幕末の人々にとっては、その功績を没することができないのである。」①と高く評価した。学者の南洋梯謙は『海国図志』がひとつの「天下の武人が必ず読まなければならない本だ」②という。幕末維新の思想家佐久間象山、吉田松陰等も深く『海国図志』の影響を受けた。佐久間象山に至っては魏源を自らの「海外同志」と称した③。吉田松陰が野山獄中に囚られた時も、依然と一心に『海国図志』を学んで、その維新思想の形成に一定の推進作用を及ぼしていたのである。中国近代の著名な思想家梁啓超のある文章においては「日本の平象山、吉田松陰、西郷隆盛輩が皆この本に刺激され、それをもって間接的に尊攘維新の活劇を演出した。」④と述べられている。

しかし中国ではこの書は惜しいながら、かえって支配者の無視を受けた。清朝皇帝と権力者たちはアヘン戦争後も教訓を覚え、逆に和議を迷信し、目の前の安全を貪り、頑に自国の伝統に固執して、積極的に世界を見ようとしなかった。全く魏源の指摘したように、朝廷上下では夷の長技を師して船や大砲をつくろうとする人がいれば、「淫らな浪費」と批判され、洋書を翻訳し外国事情を知ろうとする人がいれば、「余計なこと」としめつけられる⑤ほどであった。これに対して、当時の日本人でさえ強く憤慨を覚え残念がっていたのであった。学者塩谷宕陰は「ああ、忠智の士が国を憂い本を著しても、その君主に用いられず、逆に他の国に落ちつく。私はただ黙深のためにこれを悲しむのではなく、同時に清帝のためにこれを悲しむ!」⑥と感嘆していたのである。

二、郭嵩焘と「国の外に出て世界を見る」

十九世紀四十、五十年代に始めて世界を見ようとした先駆者たちには、まだ国の外に出るチャンスがなかった。彼らが残した世界地理・歴史の著作は、主に西洋人が編集した書籍・地図と、中国の史志・遊記等の資料を参考にして作成されていた。こうした局限のため、他人の知識と経験に依存して間接的にしか世界を認識することができなかった。故に西洋の「長技」の認識も武器や技術に止まっていた。

十九世紀六十年代を初めとして、太平天国農民の武装蜂起と第二次アヘン戦争の二重打撃のもとに、清朝支配集団は自らの支配を挽回するために、「自強」と「求富」を目標とする洋務運動を行った。洋務運動は西洋の軍事、工業、技術、教育に倣うことを主な内容とした。そのために清政府は相前後して外国への遊歴と考察に官僚を派遣し、外交官を外国に長く駐在させ、外国に留学生を送りはじめた。中国の一部の官僚や知識人はようやく国の外に出るチャンスに恵まれ、自らの目で外国を観察し、積極的かつ直接的に世界を認識することができるようになった。いわゆる「百聞は一見にしかず」と言われるように、このような人々は自ずから新しい世

界認識を持つようになっただけに、保守勢力との衝突も避けられなくなった。郭嵩焘は即ちこのような人々のなかのエリートであり、同時に孤独な先行者の一人であった。かつて梁啓超はこのようにかれのことを述べている。「光緒二年、イギリス駐在の大臣郭嵩焘という人は、一つの旅行記を著した。内容の一部では「現在の夷狄は従来のそれとは異なって、彼らにも二千年の文明を持っている」というようなことを言っている。ああ、すごいことをいった。この本は北京に伝わると、朝廷上下の士大夫に公憤を激動させ、大いに罵られた・・・この騒ぎは奉旨して版を壊すまで止まらなかった。」⑦と。

郭嵩焘（1818～1891）、字は伯琛、号して筠仙、湖南湘陰人。19歳に挙人に中第し、29歳に進士になる。翰林院編修、江蘇道台、広東巡撫代理、兵部禮部侍郎を歴任し、封建士大夫の上層に身を置いた。かれはかつて上海、広東において西洋人や西洋の学問との接触を経験し始め、洋務を行うには、まず「その情を通じて、その理に達する」べきだと思うようになった。郭嵩焘は曾国藩、左宗棠、李鴻章等の洋務派指導者との関係が深かったにもかかわらず、かれらの提唱した練兵、製器、造船、籌餉が皆「末」であって、西洋の「政教」、即ち政治、法律、教育こそが「本なり」だと考えていた。かれは出国する前に見識がすでに同時代の洋務派官僚を超えていたと言える。

1876年、郭嵩焘は清政府に「イギリス駐在欽差大臣」に任命された。これは西洋国家に派遣した近代中国の初めての外国駐在公使であった。当時、多くの封建官僚知識人は、自己中心的で、外国関係の事務を軽視し、外国駐在を追放や苦役と見なしていた。故に数多くの人が、かれに名声を保つために使命への謝絶を勧め、ある人がかれのために「惜しいな」「悪運だ」と感嘆し惜しがった。慈禧太后でさえも、かれに「出洋するのは、もともと極めて苦しい職務だ」「君は国家のためにこのような苦難の職についたと思いたまえ。」⑧という。この時の郭嵩焘は、すでに歳が60に近くて、しかも病気の身であったが、国家の遭遇してきた苦難への思いと強い責任心に駆られ、さらにいっそう「洋情を通察する」「西洋の学問と西洋の政教を探究する」ことができることなどを考えた上に、派遣の受諾を決断したのである。

郭嵩焘は1876年の末に上海から出発し、1877年1月21日にロンドンに到着して、そして1879年1月31日に至って、イギリスを立て帰国したのである。かれはイギリスでの滞在は二年間だけだったが、中華帝国の西洋世界に派遣した初めての高級官僚として、自らの観察と思考を通じて、世界に対して、特に西洋の政治や文化に対して、幾多の新しい認識を獲得した。まず実際の考察を通じて、かれは再び西洋各国を夷狄と見なしてはいけないと考え、「西洋は立国して二千年で、政教を修明し、本末を有する。」と指摘した。かれは敢えて西洋の資本主義文明が中国の封建文明を超えたことを認め、並びに大量な事実を挙げてヨーロッパ各国の文明程度を説明しようとした。たとえば、ロンドンの万国公法学術討論会に出席した時、その「議論の公平、規模の整然」を見て、中国では、未だに見たことがないというのであった。遅れを進歩の始まりとして認めている。郭嵩焘に見たこのような世界認識の確立には、大変な勇気と理性を必要とするものであったと言える。

その他、郭嵩焘の西洋世界の長所に対する認識は、一般の洋務派の官僚がよく口にする練兵、製器（工業を興す）とは異なって、もっと西洋資本主義の民主的政治制度に注目するものであ

た。かれは「西洋の国々が長く続くのは、君民が共に国政を司るがためであった。」という。かれは西洋国家の議会制度を褒めて、自ら議会への傍聴に臨んだばかりでなく、他人に質問したり、ノートを書いたりし、さらに自分の心得を手紙で親友に教えたり、朝廷に上奏したりして、中国の政治を改革しようと願ったのである。かれはまた西洋国の監獄等の司法機構を参観し、その清潔で厳然たる様子に賛嘆を示してやまなかった。郭嵩焘は「富強の術を一心に求め、本源の所に対して未だに討論が届いていない。これは末を治めてその本を忘れ、委細を極めてその源を曖昧にした」と李鴻章等の洋務派高官を批判した。同時に、かれは西洋資本主義の経済、文化、教育を学ぶことをも提唱した。かれは現場で西洋各国の工場、学校を考察しながら、西洋の経済、教育理論を探究していた。かれは中国の民族工業を振興し、利民政策をもって民富の目的に達することを主張した。また教育の近代文明建設における重要な役割を強調し、多くの学校を作り、多くの留学生を派遣する実用的な教育体制の形成を建議していたのである。かれはさらに西洋の文化や学術の紹介と研究を呼びかけ、中国人をして世界のことを分からせ、世界の発展潮流に遅れないようにすべきだという。かれはかつて詳しくギリシア学術史とヨーロッパ科学史を日記するしていたが、これはおそらく近代中国における同分野のもっとも早かった紹介であったろう。

ここでさらにふれておきたいのは、郭嵩焘はイギリスでまた日本人とも会見し、かれらと近代化のことを話し合っ、中日両国における西洋学習の状況に対して比較論を行っていたことである。かれはかつてロンドンでイギリス考察に赴いた日本の大蔵大輔、井上馨と会見て、経済や税収等の話題を交わし、並びに井上馨にどんな西洋書籍を読んだかを聞き、アダムスミ、ジョンモール等の名前をノートに控えた。かれは日記において「国を治める策についての話は、多く聞くに値するものがある。中国の人才はそれに遠く及ばなくて万里の距離がある。恥ずかしい極みである!」。かれはさらに当時イギリスの中国人留学生が数人しかなく、しかも全員海軍を学ぶものだったが、イギリスにいる日本人留学生は二百人あまりもあり、ロンドンにも九十人はどあって、各種の技術を学んでいた。郭嵩焘が自ら会った者も二十人あまりおり、その「殆どは皆英語ができる」。長岡良之助という人は、元は貴族の出身で、イギリスで法律を学んでいた。かれは日本が全面的に西洋に習い、どんどん変化して、西洋人でさえその「進歩を求める勇氣」に敬服していることに気づき、中国人が依然と「自らを以て安んずる」に止まったことに「深い憂慮」を覚えざるを得なかった。

郭嵩焘の世界認識ははるかに前人と同時代人を超えたため、保守勢力の罵りと攻撃に会わされてしまった。かつてかれは外国駐在の当初、香港、シンガポール、セイロン等のところを経てロンドンに至った50日の見聞を『使西紀程』という本に記されて、総理衙門にその写しを送って刊行してもらった。この本は西洋の政治と文化を讃え、並びに中国の官僚に見る時代の勢いに疎い虚妄な傲慢と自尊を批判し、早くも大きな騒ぎを引き起こして、保守勢力の猛烈な攻撃を浴びた。李慈銘という人は「何を企んでいるのか」と、かれを責めた。翰林院編修である何金寿に至っては「イギリスにふたどころがあり」⑨と、かれを弾劾した。結局清政府は『使西紀程』の版を壊すように命令し、刊行を禁止した。

イギリス駐在の期間内に、郭嵩焘はまた頑固派副使劉錫鴻の中傷と誹謗に遭わされた。劉錫

鴻が朝廷に対して摘発した郭嵩焘の所謂「三大罪」は、実は非常におかしいものであった。第一の罪では郭嵩焘が甲敦砲台を見物した時に西洋人の衣服を被ったということである。かれは「たとえ凍え死にしても、被るべきではない」と考えていた。第二の罪は郭嵩焘がブラジル国王に見した時に起立したこと。「堂々の天朝、小国の主に敬礼を致す必要はない」と考えられていた。第三の罪は郭嵩焘がバッキンガム宮に赴いて音楽を聞き、プログラムを取ったこと。これは「西洋人の行為に倣う」とことと決めつけられた。劉錫鴻はまたイギリスの白書において郭嵩焘を讃える議論の段落を抄録し、それを外国に密通した証拠とした。郭嵩焘は上書して自分の弁護を図ったが、かえって朝廷に責められていた。国内の保守勢力も揃ってかれを職から外して審査することを要求し、「国体人心を維持する」と騒いだ。このような情勢のもとに、郭嵩焘は自ら引退せざるを得ず、病気で辞職を朝廷に上奏した。清政府は速やかに曾国藩の息子である曾紀沢をイギリス駐在公使の後任として派遣した。郭嵩焘が帰国してから再び任用されることがなく、故郷の湖南に帰っても、当地の保守紳士の敵視と罵りを受けつづけた。しかしかれは「誹謗が天下に遍ねくも、我が心は泰然なり」と揺るぎない内心を示した。こうしてこの近代中国の初めての外国駐在公使は、むしろ悲劇的な色彩を一身にまといながら世界を認識し、世界に向かって走っていく孤独な先行者たることを誇りとしていたのであった。

三、康有為と「倣洋改制して世界を見る」

十九世紀九十年代の日清戦争は中国に巨大な災難をもたらしたと同時に、中華民族の目覚めを刺激した。日清戦争の敗北、下関條約の恥辱めと踵を接した分割の狂瀾は、多くの中国人に亡国滅種の危機感と世界における恥辱感を抱かせた。先進な中国人は、世界を認識すること、歴史の潮流に順応すること、または変法維新をすること、存亡を救うことを緊密に絡み合せて考えるようになった。戊戌維新運動の指導者康有為が即ちその優れた代表人物の一人である。

康有為（1858～1927）、名祖詒、字広廈、号長素、広東南海人。かれは青年時代に伝統儒学に習った他に西洋の学問をも学んで、世界の大勢と各国の歴史を知っていた。日清戦争後、康有為はいろいろなところに呼びかけて、時勢の陰悪と救亡の危機を訴え回った。かれは、世界情勢について新たな認識と判断を持って、現在世界が一つの列国競争の世界だとし、各国は「雄を争って長を競い、強くならなければ弱くなり、大きくならなければ小さくなり、存しなければ亡する」^⑩として、中国は「大地の外に出ることができないし、国を閉ざすこともできない」ので、競争の中で生存を図るしかない、と強調したのである。康有為は、一方において世界に目を向け、各国の歴史と政治を比較し研究しながら、アジアやアフリカの多くの国々が西洋列強に分割されたのが、皆「旧を守って変化せず、君主が自らを尊び、民衆は隔てた国」だった現実を見つめて、旧を守ると亡国になることを指摘し、これを前轍の鑒とすべきだとした。一方においてかれはまた欧米の国々や日本が資本主義革命或いは改革を通じて富強の道を歩んだのを評価して、これらを勉強の手本にすべきだとした。たとえばロシアはペートル帝の改革を通じて「変政してついに大地を覇する」、日本は明治維新を経て「方針を改めて東方を威圧する」。従ってかれは現在の競争世界において、亡を救い自らを強めようとしたら、「変法

の他に、図ることはない」^⑪と結論づけていたのである。

いままでの研究では、往々にして康有為の「託古改制」（古に託して制を改める）を取り上げ、すなわち儒教聖人孔子を変法改制の祖とし、その維新運動を進めるため歴史的な根拠を提供することばかりを強調してきた。しかし筆者は康有為の「倣洋改制」こそがかれの維新運動の発動におけるもっとも重要な理論根拠であったと考える。そこにはもっとも集中的にかれの世界認識や西洋学習の要求、資本主義近代化の道を歩もうとする政治主張が反映していたと言える。これは同時にかれが戊戌維新の間にもっとも精力を注ぎ込んだ仕事の一つでもある。

康有為を始めとする維新派の大々的な宣伝と鼓動のもとで、多くの人は中国を救うには、維新しかなく、維新をするには外国を学ぶ以外はないことを認識し、若い光緒皇帝も変法の実行を決心した。しかし一体どのように外国を学び、外国にはどんな変法の経験と教訓があるかについては、皇帝と大臣たちは皆「万国の情状を知らない」のである。従って康有為は力を入れて一連の列国変政考を編纂して、光緒皇帝に進呈しようとし、これで各国の変法の経過を紹介し、「その本源と利弊を究める」ことによって、歴史的な経験と教訓を総括して、中国近代化の青写真を提出させ、中国の変法維新のためにかがみや手本を提供しようと決心した。康有為が自ら編集した年譜によると、かれは1898年戊戌維新の間に、相前後して光緒皇帝に『俄彼得変政記』、『日本変政考』、『波蘭分滅記』、『列国比較表』及びフランス、ドイツ、イギリス変政考等の本を進呈した。このような本は『俄彼得変政記』の他に、殆ど刊行されていなかった。いままで普通は戊戌政変の関係資料が既に壊されてその歴史的な真面目を見るのが難しいと思われるが、しかし幸いにいまも行方不明のままの英、仏、独等の国の変政考を別として、康有為が当年光緒皇帝に進呈した『日本変政考』、『波蘭分滅記』等の本は、依然と北京の故宮博物院内に保存されている。筆者は1980年の初め、故宮において『日本変政考』進呈原本を発見してから、かつて『歴史研究』雑誌に長い考証と紹介の文章を発表していた^⑫。次に康有為が倣洋改制のために書いた三つの外国変政考について簡単な紹介をしよう。

『俄彼得変政記』は、1898年3月に、光緒帝に進呈し、並びに同年の4月に、上海大同訳書局が出版した『南海先生七上書記』のなかに収録されていた。康有為は、光緒帝が「ロシアのペョートルの心を心の法にし」、「君権をもって変法する」ことを願っていた。かれはまずペョートル帝に倣って歴史的な潮流に順応し変法の決心を固めることを光緒帝に要求し、そしてペョートル帝に倣って「千年の自尊自愚の習わしを破棄し」、「万国の美法」に習うことを光緒帝に要求した。さらに中国の保守頑固勢力が極力に変法を阻止し破壊しようとすることに對して、ペョートル帝に倣って「乾綱を独断」し、厳しく旧い勢力を打撃するように光緒帝に希望した。この本は光緒皇帝が維新の詔を下すのを決意するために大きな役割を果たした。

『波蘭分滅記』は全部で7巻で、百日維新の後期、即ち1898年8月中旬に進呈したのである。その目的と重心は、如何に変法の阻害を一掃して変法を最後まで進めるかにあった。康有為はこの本をもってポーランドが時に応じて果敢に変法しなかったため、保守派の破壊と外国の干渉に遭わされ、変法が失敗し国が分割されて滅ばされたのに至った悲惨な教訓を光緒皇帝に提供し、中国の「前轍のかがみ」とした。光緒帝は、それを読んでから多大な刺激と啓発を受け、変法の勇気を強めて、まもなく禮部六大臣の職務を外すような保守勢力を打撃する重大な行動

を取ったのである。

康有為が書いた外国変政考のなかで、もっとも重要な一つは、いうならばその倣洋改制的な維新思想を唱えた代表作とも言える『日本変政考』である。これはかれが光緒皇帝の旨を奉じて、1898年7、8月間に、巻を分かって相前後して進呈したのである。私が故宮で発見した進呈本正文は函函12巻で、ほかに付録『日本変政表』一卷、全部で15万字あまりある。『日本変政考』は一つの編年体の史書であり、明治元年から明治23年に至るまで、時間順に分けて日本明治維新後の大事件と各種の改革措置を各条ごとに記載し、その上に自らの案語を加えていた。一方において日本政府が各項目の改革措置を取った原因を分析し、その成果と効率、利と弊を分析し、一方において中国の実際状況に照らして、中国の変法維新の具体的な意見を提出し、集中的に康有為の変法的主張を現したのである。変法維新を通じて西洋と日本に習って近代化を実現するための近代中国の青写真の一つだったと言える。

康有為は世界への認識と東西両洋各国の歴史の分析と比較を通じて、日本の明治維新を中国の維新変法のもっとも理想的な見本として選んだ。かれは明治維新を経て富国強兵と日清戦争の勝利に達した日本の効果が、変法の必要性と可能性を証明するのに十分だったと考えていた。また日本明治維新の具体的な歩みと措置は、中国の変法のために改革の道と方法を示したとし、日本の変法に見る利弊曲折は、すなわち参考の経験と教訓を提供し、「日本人のすでに変化した中の成功の部分を収めて、その錯誤の中のやりすぎを捨てる」ことができるとされた。康有為は、光緒皇帝が明治天皇のように自ら大権を掌握し号令を司って、君権をもって中国で上からの資本主義改革を実現させることを夢見た。しかも日本と中国は地理、風俗、文化が近いし、日本の変法を学ぶのに、多くの便利な条件と有利な心理要素を有するとされていた。従って康有為は『日本変政考』の最後に「我が朝廷の変法は、但し日本に鑑を采るだけでも、すべて足るなり」と、断然と言明していたのである。

『日本変政考』は日本明治維新の改革の全過程を述べたばかりでなく、中国戊戌維新の改革すべき各方面にも言及していた。康有為は自らの倣洋改制的主張、意見を、時に日本維新の史実を記述したところに寓意し、時に即ち直接に自らに書かれた案語のなかに述べた。かれはこの本を光緒皇帝に進呈し、この本が光緒皇帝の変法の指南となり、戊戌維新と中国の近代化を実行するための青写真となることを望んでいた。故にかれは本の跋語のなかで「中国の変法と自強に切して、すべてこの本にある。臣愚が考察した万国の書には、この書の詳細に及ぶものはない」と、光緒皇帝に言う。「我が皇上はこれを読み、これをもって鑑を采って、自らを強める。もしこれを棄てて采らないならば、亦さらに自強する法はもうない」^⑬と、一冊の本をもって中国を救う厳然たる気概を見せている。光緒皇帝は『日本変政考』を読んで、大いに喜び、前の巻が進呈されたばかりなのに、また次の巻を催促し、「左右に置いて、次第にそれを選んで実行しよう」としたのである。百日維新期間において光緒帝が出した多くの新政の命令、詔書は、『日本変政考』の内容を参考にした。但し中日両国の維新は時代・国情・条件ともに異なり、もっとも中国では新旧勢力の力の対比が余りにもかけ離れていた。慈禧太后を始めとする強大な保守勢力が政変を発動し、百日維新が迅速に失敗した。光緒皇帝は中南海の瀛台に幽禁され、康有為、梁啓超はやむを得ず海外に逃亡し、『日本変政考』等の本も長期に渡って

冷遇されて、世間に知られなくなった。中国の近代化は再び挫折と遅延を余儀なくされた。

近代中国人が世界を認識し近代化に向かった道は、困難や曲折が多かったにも関わらず、一步一步に前へ進んだと言える。中華民族は一世紀あまりの努力と奮闘を経て、最終的に世界に進み、世界の各民族の一員として自立して、現代化建設の新しい時代を開いたのである。

注 釈

- ① 杉木達『美理哥国総記和解』上冊跋。
- ② 南洋梯謙『海国図志籌海篇訳解』序。
- ③ 佐久間象山『跋魏邵陽聖武記後』。
- ④ 梁啓超『論中国學術思想變遷之大勢』。
- ⑤ 魏源『海国図志』籌海篇。
- ⑥ 塩谷宕陰『翻刊海国図志』序。
- ⑦ 梁啓超『五十年中国進化概論』。
- ⑧ 郭嵩焘『倫敦与巴黎日記』、郭嵩焘言論の引用文の多くはこの本に基づいている。一に注を付けないことにする。
- ⑨ 王闡運『湘綺樓日記』。
- ⑩ 康有為『日本變政考』序。
- ⑪ 康有為『上清帝第五書』。
- ⑫ 王曉秋「康有為の一部未刊印の重要著作——“日本變政考”評介」『歴史研究』1980年第3期。
- ⑬ 康有為『日本變政考』跋。

= 中国語訳 =

一個自我封閉的不認識世界的国家，是無法實現近代化的。近代中国的先驅者在認識世界和走向近代化的道路上，經過了漫長，曲折，艱難的歷程。本文試圖通過鴉片戰爭時期的魏源，洋務運動時期的郭嵩焘和戊戌維新時期的康有為這樣幾位近代中国走向世界的杰出代表人物及其著作，勾画出十九世紀下半叶，為爭取中国的獨立，富強和進步的先驅者的，如何一步步認識世界和推動中国近代化進程的歷史軌迹。

一、魏源与睜開眼睛看世界

長期以来，中国歷代王朝的統治者都把中国看成是世界的中心，以天朝上国自居，而把其他国家視為野蛮落后应向自己朝拜進貢的夷狄。直到1840年英国發動鴉片戰爭，道光皇帝還不知道英国究竟在什麼地方。

十九世紀四、五十年代，受到鴉片戰爭失敗的強烈刺激，中国的官僚和知識分子中間一批愛國開明的有識之士，開始睜開眼睛看世界，了解國際形勢，研究外国史地，總結失敗的教訓，尋找御敵的方法和救国的道路。魏源是其中的杰出人物之一。他在好友林則徐編訳的《四洲志》的基礎上，收集大量中外資料，於1843年1月編成《海国図志》50卷，1847年擴充為60卷，1852年又增補到100卷。全書共88万字，除介紹世界各国的歷史地理外，還有論述海防戰略戰術和武器科

技等内容。這是近代中国人自己編撰的第一部关于世界史地的重要著作，也是當時東亞国家关于世界知識最豐富的一部巨著。《海国图志》冲破了中国是世界中心，天朝上国的傳統旧觀念，樹立了中国並非世界中心只是世界一員，並且應該向外国的長处學習的新世界觀念。此書力图反映世界各国的真實面貌，並提出了“師夷長技以制夷”的思想，開創了中国近代向西方學習，探索近代化道路的時代新風。

值得注意的是魏源的《海国图志》很快就传入日本，得到广泛流传，並引起強烈反響，推動了日本的開国和維新。据筆者在日本各圖書館調查所見，僅1854—1856年三年間，日本出版的《海国图志》選本的翻刻本，訓点本和日訳本就有21種之多。它幫助幕末日本人士了解世界大勢和加強海防建設，並促進開国和倒幕維新思想的產生。可惜該書在中国反而受到統治者的冷落，以至連日本人士也為之扼腕嘆息。

二，郭嵩焘与走出国門看世界

十九世紀六十年代起，清政府在內憂外患双重冲擊下，為挽救其統治，開展了以學習西方軍事，工業，科技，教育為主要內容的洋務運動。陸統派外交官出使外国，派官員和留学生出国考察和留学。中国少数官僚和知識分子終於有機會跨出国門，通過自己的眼睛觀察外国，主動地直接地去認識世界。郭嵩焘就是這批人中的佼佼者。1876年他被任命為出使英国欽差大臣，這是近代中国向西方派遣的第一位駐外公使。通過觀察與思考，他對世界尤其是西方政治与文化多生了許多新的認識。他認為對西洋各国再不能以夷狄視之，而且勇敢地承認西方文明已經超過中国。他對西方文明的認識更注重西方資產階級国家的政治和法律制度，如贊揚議會制等。他該為學習西方的軍事，工業，科技只是“末”，而學習西方的政治，法律，教育才是“本”，這種見識已遠遠超過洋務派的大員們。

值得一提的是郭嵩焘在英国還曾會見井上馨等日本人士，與他們探討近代化的途徑，並對中日兩西國學習西方的情況加以比較。

由于郭嵩焘的世界認識超越了同時代人，竟遭到保守勢力的詆毀和圍攻。他的出使英国日記《使西紀程》引起軒然大波，以致被清政府毀板禁止刊行。在出使英国期間，他又遭到頑固派副使劉錫鴻的誣蔑陷害，羅織種種荒唐罪狀，甚至誣陷其里通外国。迫使郭嵩焘不得不于1879年1月提前辭職引退離英歸国。回国以后再也未受朝廷任用，而且還受到家鄉守旧士紳敵視，成為一位孤独的先行者。

三，康有為与做洋改制看世界

十九世紀九十年代的甲午戰爭在給中国帶來巨大歷史災難的同時，也刺激了中華民族的覺醒。先進的中国人開始把認識世界與順應歷史潮流變法維新救亡圖存緊密地結合起來，維新派領袖康有為就是其中杰出代表人物。

過去論者往往強調康有為的“托古改制”，即把儒家聖人孔子說成變法改制的祖師爺，為其發動維新運動提供歷史根據。而筆者認為康有為的“做洋改制”才是他發動維新運動最重要的理論

根据。而且更集中地反映了他認識世界，要求向西方學習，走資本主義近代化道路的政治主張。同時也是他在戊戌維新期間花精力最多的一項工作。

康有為對世界形勢作了新的認識和判斷。他指出当今世界是一個列國競爭的世界，要救亡自強，只有學習外國，變法維新。為了向光緒皇帝和中國的士大夫介紹世界各國變法的情況和經驗教訓，作為中國做洋改制實行維新的借鑑。康有為在1898年戊戌維新期間花了大量時間與精力，先後編寫並向光緒皇帝進呈了俄國，日本，波蘭，英國，法國，德國等一條列外國變政考。這批書除《俄彼得變政記》外都未刊行。以往學術界以為早已佚毀。筆者1980年有幸在北京故宮博物院發現《日本變政考》進呈原本，並進行了詳細考證和研究。這部書是康有為做洋改制最重要的代表作。他通過對世界的認識和對東西方各國歷史的分析比較，選取了日本明治維新作為中國變法維新最理想的榜樣，幻想光緒皇帝能象日本明治天皇一樣親掌大權發號施令，以君權在中國實現自上而下的資產階級改革。在《日本變政考》中，康有為不僅描述了日本明治維新的全過程，而且詳細分析了明治維新各項改革措施的利弊得失，並提出了中國變法維新的具體建議。他希望這部書成為光緒皇帝變法的指南和實行戊戌維新與中國近代化的藍圖。雖然光緒皇帝得到此書如獲至寶，挾而行之。然而中日兩國維新的時代，國情，條件都有很大不同，尤其是中國新舊勢力力量對比懸殊。以慈禧太后為首的強大守舊勢力發動政變，百日維新迅速失敗，光緒皇帝遭到幽禁，康有為被迫流亡海外，中國的近代化又一次遭到挫折和延誤。